八一　栃内の字野崎（のざき）に前川万吉という人あり。二三年前に三十余にて亡くなりたり。この人も死ぬる二三年前に夜遊びに出でて帰りしに、門（かど）の口（くち）より廻（まわ）り縁（えん）に沿いてその角（かど）まで来たるとき、六月の月夜のことなり、何心（なにごころ）なく雲壁（くもかべ）を見れば、ひたとこれにつきて寝たる男あり。色の蒼（あお）ざめたる顔なりき。大いに驚きて病みたりしがこれも何の前兆にてもあらざりき。田尻氏の息子丸吉この人と懇親にてこれを聞きたり。

八二　これは田尻丸吉という人が自ら遭（あ）いたることなり。少年の頃ある夜常居（じょうい）より立ちて便所に行かんとして茶の間に入りしに、座敷（ざしき）との境に人立てり。幽（かす）かに茫としてはあれど、衣類の縞（しま）も眼鼻もよく

見え、髪をば垂（た）れたり。恐ろしけれどそこへ手を延ばして探りしに、板戸にがたと突き当り、戸のさんにも触（さわ）りたり。されどわが手は見えずして、その上に影のように重（かさ）なりて人の形あり。その顔のところへ手を遣（や）ればまた手の上に顔見ゆ。常居（じょうい）に帰りて人々に話し、行灯（あんどん）を持ち行きて見たれば、すでに何ものもあらざりき。この人は近代的の人にて怜悧（れいり）なる人なり。また虚言をなす人にもあらず。

八三　山口の大同、大洞万之丞（おおほらまんのじょう）の家の建てざまは少しく外（ほか）の家とはかわれり。その図次のページに出す。玄関は巽（たつみ）の方に向かえり。きわめて古き家なり。この家には出して見れば祟（たたり）ありとて開かざる古文書の葛籠（つづら）一つあり。

八四　佐々木氏の祖父は七十ばかりにて三四年前に亡くなりし人なり。この人の青年のころといえば、嘉永（かえい）の頃なるべきか。海岸の地には西洋人あまた来住してありき。釜石（かまいし）にも山田にも西洋館あり。船越（ふなこし）の半島の突端にも西洋人の住みしことあり。耶蘇（ヤソ）教は密々に行われ、遠野郷にてもこれを奉じて磔（はりつけ）になりたる者あり。浜に行きたる人の話に、異人はよく抱き合いては嘗（な）め合う者なりなどいうことを、今でも話にする老人あり。海岸地方には合（あい）の子（こ）なかなか多かりしということなり。

八五　土淵村の柏崎（かしわざき）にては両親とも正（まさ）しく日本人にして白子（しらこ）二人ある家あり。髪も肌も眼も西洋人の通りなり。今は二十六七ぐらいな

るべし。家にて農業を営（いとな）む。語音も土地の人とは同じからず、声細くして鋭（するど）し。

八六　土淵村の中央にて役場小学校などのあるところを字本宿（もとじゅく）という。此所に豆腐屋（とうふや）を業とする政という者、今三十六七なるべし。この人の父大病にて死なんとするころ、この村と小烏瀬（こがらせ）川を隔てたる字下栃内（しもとちない）に普請（ふしん）ありて、地固めの堂突（どうづき）をなすところへ、夕方に政の父ひとり来たりて人々に挨拶（あいさつ）し、おれも堂突をなすべしとて暫時仲間に入りて仕事をなし、やや暗くなりて皆とともに帰りたり。あとにて人々あの人は大病のはずなるにと少し不思議に思いしが、後に聞けばその日亡くなりたりとのことなり。人々悔みに行き今日のこと

を語りしが、その時刻はあたかも病人が息を引き取らんとするころなりき。

八七　人の名は忘れたれど、遠野の町の豪家にて、主人大煩（おおわずら）いして命の境に臨みしころ、ある日ふと菩提寺（ぼだいじ）に訪い来たれり。和尚（おしょう）鄭重（ていちょう）にあしらい茶などすすめたり。世間話（せけんばなし）をしてやがて帰らんとする様子に少々不審あれば、跡より小僧を見せに遣（や）りしに、門を出でて家の方に向い、町の角（かど）を廻りて見えずなれり。その道にてこの人に逢いたる人まだほかにもあり。誰にもよく挨拶して常（つね）の体（てい）なりしが、この晩に死去してもちろんその時は外出などすべき様態（ようだい）にてはあらざりしなり。後に寺にては茶は飲みたりや否やと茶椀を置きしところを改めしに、畳

（たたみ）の敷合（しきあ）わせへ皆こぼしてありたり。

八八　これも似たる話なり。土淵村大字土淵の常堅寺（じょうけんじ）は曹洞宗（そうとうしゅう）にて、遠野郷十二ヶ寺の触頭（ふれがしら）なり。或る日の夕方に村人何某という者、本宿（もとじゅく）より来る路にて何某という老人にあえり。この老人はかねて大病をして居る者なれば、いつのまによくなりしやと問うに、二三日気分も宜（よろ）しければ、今日は寺へ話を聞きに行くなりとて、寺の門前にてまた言葉を掛け合いて別れたり。常堅寺にても和尚はこの老人が訪ね来たりし故（ゆえ）出迎え、茶を進めしばらく話をして帰る。これも小僧に見させたるに門の外（そと）にて見えずなりしかば、驚きて和尚に語り、よく見ればまた茶は畳の間にこぼしてあり、

老人はその日失（う）せたり。

八九　山口より柏崎へ行くには愛宕山（あたごやま）の裾（すそ）を廻（まわ）るなり。田圃（たんぼ）に続ける松林にて、柏崎の人家見ゆる辺より雑木（ぞうき）の林となる。愛宕山の頂（いただき）には小さき祠（ほこら）ありて、参詣（さんけい）の路は林の中にあり。登口（のぼりくち）に鳥居（とりい）立ち、二三十本の杉の古木あり。その旁（かたわら）にはまた一つのがらんとしたる堂あり。堂の前には山神の字を刻みたる石塔を立つ。昔より山の神出づと言い伝うるところなり。和野（わの）の何某という若者、柏崎に用事ありて夕方堂のあたりを通りしに、愛宕山の上より降（くだ）り来る丈（たけ）高き人あり。誰ならんと思い林の樹木越しにその人の顔のところを目がけて歩み寄りしに、道の角

（かど）にてはたと行き逢いぬ。先方は思い掛けざりしにや大いに驚きて此方を見たる顔は非常に赤く、眼は耀（かがや）きてかついかにも驚きたる顔なり。山の神なりと知りて後（あと）をも見ずに柏崎の村に走りつきたり。

○遠野郷には山神塔多く立てり、そのところはかつて山神に逢いまたは山神の祟を受けたる場所にて神をなだむるために建てたる石なり。

九十　松崎村に天狗森（てんぐもり）という山あり。その麓なる桑畠（くわばたけ）にて村の若者何某という者、働きていたりしに、頻（しきり）に睡（ねむ）くなりたれば、しばらく畠の畔（くろ）に腰掛けて居眠（いねむ）りせんとせしに、きわめて大なる男の顔は真赤（まっか）なるが出で来たれり。若者は気軽にて平生（へいぜ）

相撲（すもう）などの好きなる男なれば、この見馴（みな）れぬ大男が立ちはだかりて上より見下すようなるを面悪（つらにく）く思い、思わず立ち上りてお前はどこから来たかと問うに、何の答えもせざれば、一つ突き飛ばしてやらんと思い、力自慢（ちからじまん）のまま飛びかかり手を掛けたりと思うや否や、かえりて自分の方が飛ばされて気を失いたり。夕方に正気づきてみれば無論その大男はおらず。家に帰りてのち人にこの事を話したり。その秋のことなり。早池峯の腰へ村人大勢とともに馬を曳（ひ）きて萩（はぎ）を苅りに行き、さて帰らんとするころになりてこの男のみ姿見えず。一同驚きて尋ねたれば、深き谷の奥にて手も足も一つ一つ抜き取られて死していたりという。今より二三十年前のことにて、この時の事をよく知れる老人今も存在せり。天狗森には天狗多くいるという

ことは昔より人の知るところなり。

九一　遠野の町に山々の事に明るき人あり。もとは南部男爵（だんしゃく）家の鷹匠（たかじょう）なり。町の人綽名（あだな）して鳥御前（とりごぜん）という。早池峯、六角牛の木や石や、すべてその形状と在処（ありどころ）とを知れり。年取りてのち茸採（きのこと）りにとて一人の連（つれ）とともに出でたり。この連の男というは水練の名人にて、藁（わら）と槌（つち）とを持ちて水の中に入り、草鞋（わらじ）を作りて出てくるという評判の人なり。さて遠野の町と猿ヶ石川を隔つる向山（むけえやま）という山より、綾織（あやおり）村の続石（つづきいし）とて珍しき岩のある所の少し上の山に入り、両人別れ別れになり、鳥御前一人はまた少し山を登りしに、あたかも秋の空の日影、西

の山の端（は）より四五間（けん）ばかりなる時刻なり。ふと大なる岩の陰（かげ）に赭（あか）き顔の男と女とが立ちて何か話をして居るに出逢（であ）いたり。彼らは鳥御前の近づくを見て、手を拡（ひろ）げて押し戻すようなる手つきをなし制止したれども、それにも構（かま）わず行きたるに女は男の胸に縋（すが）るようにしたり。事のさまより真の人間にてはあるまじと思いながら、鳥御前はひょうきんな人なれば戯（たわむ）れて遣（や）らんとて腰なる切刃（きりは）を抜き、打ちかかるようにしたれば、その色赭き男は足を挙（あ）げて蹴（け）りたるかと思いしが、たちまちに前後を知らず。連なる男はこれを探（さが）しまわりて谷底に気絶してあるを見つけ、介抱して家に帰りたれば、鳥御前は今日の一部始終を話し、かかる事は今までに更になきことなり。おのれはこの

ために死ぬかも知れず、ほかの者には誰にもいうなと語り、三日ほどの間病みて身まかりたり。家の者あまりにその死にようの不思議なればとて、山臥（やまぶし）のケンコウ院というに相談せしに、その答えには、山の神たちの遊べるところを邪魔したる故、その祟（たたり）をうけて死したるなりといえり。この人は伊能先生なども知合（しりあい）なりき。今より十余年前の事なり。

九二　昨年のことなり。土淵村の里の子十四五人にて早池峯に遊びに行き、はからず夕方近くなりたれば、急ぎて山を下り麓（ふもと）近くなるころ、丈（たけ）の高き男の下より急ぎ足に昇りくるに逢えり。色は黒く眼（まなこ）はきらきらとして、肩には麻かと思わるる古き浅葱色（あさぎいろ）の風呂敷（ふろしき）にて小さき包

を負いたり。恐ろしかりしかども子供の中の一人、どこへ行くかと此方より声を掛けたるに、小国（おぐに）さ行くと答う。この路は小国へ越ゆべき方角にはあらざれば、立ちとまり不審するほどに、行き過ぐると思うまもなく、はや見えずなりたり。山男よと口々に言いてみなみな遁げ帰りたりといえり。

九三　これは和野の人菊池菊蔵という者、妻は笛吹峠のあなたなる橋野より来たる者なり。この妻親里へ行きたる間に、糸蔵という五六歳の男の児（こ）病気になりたれば、昼過（ひるす）ぎより笛吹峠を越えて妻を連れに親里へ行きたり。名に負う六角牛の峯続きなれば山路は樹深く、ことに遠野分より栗橋分へ下らんとするあたりは、路はウドになりて両方は岨（そば）なり。日影はこの岨に隠れてあたりやや薄暗くな

りたるころ、後の方より菊蔵と呼ぶ者あるに振り返りて見れば、崖（がけ）の上より下を覗（のぞ）くものあり。顔は赭く眼の光りかがやけること前の話のごとし。お前の子はもう死んで居るぞという。この言葉を聞きて恐ろしさよりも先にはっと思いたりしが、はやその姿は見えず。急ぎ夜の中に妻を伴（とも）ないて帰りたれば、果して子は死してありき。四五年前のことなり。

○ウドとは両側高く切込みたる路のことなり。東海道の諸国にてウタウ坂・謡坂などいうはすべてかくのごとき小さき切通しのことならん。

九四　この菊蔵、柏崎なる姉の家に用ありて行き、振舞（ふるま）われたる残りの餅（もち）を懐（ふところ）に入れて、愛宕山の麓（ふもと）の林を過ぎしに、象坪（ぞうつぼ）の藤七という大酒呑（おおざ

けのみ）にて彼と仲善（なかよし）の友に行き逢えり。そこは林の中なれど少しく芝原（しばはら）あるところなり。藤七はにこにことしてその芝原を指（ゆびさ）し、ここで相撲（すもう）を取らぬかという。菊蔵これを諾し、二人草原にてしばらく遊びしが、この藤七いかにも弱く軽く自由に抱（かか）えては投げらるる故（ゆえ）、面白きままに三番まで取りたり。藤七が曰く、今日はとてもかなわず、さあ行くべしとて別れたり。四五間（けん）も行きてのち心づきたるにかの餅見えず。相撲場に戻りて探したれどなし。始めて狐ならんかと思いたれど、外聞を恥じて人にもいわざりしが、四五日ののち酒屋にて藤七に逢いその話をせしに、おれは相撲など取るものか、その日は浜へ行きてありしものをと言いて、いよいよ狐と相撲を取りしこと露顕したり。されど菊蔵はなお他の人々には包み隠して

ありしが、昨年の正月の休みに人々酒を飲み狐の話をせしとき、おれもじつはとこの話を白状し、大いに笑われたり。

○象坪は地名にしてかつ藤七の名字なり。象坪という地名のこと『石神問答（いしがみもんどう）』の中にてこれを研究したり。

九五　松崎の菊池某という今年四十三四の男、庭作りの上手（じょうず）にて、山に入り草花を掘りてはわが庭に移し植え、形の面白き岩などは重きを厭（いと）わず家に担（にな）い帰るを常とせり。或る日少し気分重ければ家を出でて山に遊びしに、今までついに見たることなき美しき大岩を見つけたり。平生（へいぜい）の道楽なればこれを持ち帰らんと思い、持ち上げんとせしが非常に重し。あたかも人の立ちたる形して丈（たけ）もやがて人ほどあり。されどほしさのあまりこれを負い、我慢して

十間ばかり歩みしが、気の遠くなるくらい重ければ怪しみをなし、路（みち）の旁（かたわら）にこれを立て少しくもたれかかるようにしたるに、そのまま石とともにすっと空中に昇（のぼ）り行く心地（ここち）したり。雲より上になりたるように思いしがじつに明るく清きところにて、あたりにいろいろの花咲き、しかも何処（いずこ）ともなく大勢の人声聞えたり。されど石はなおますます昇（のぼ）り行き、ついには昇り切りたるか、何事も覚えぬようになりたり。その後時過ぎて心づきたる時は、やはり以前のごとく不思議の石にもたれたるままにてありき。この石を家の内へ持ち込みてはいかなることあらんも測（はか）りがたしと、恐ろしくなりて遁げ帰りぬ。この石は今も同じところにあり。おりおりはこれを見て再びほしくなることありといえり。

九六　遠野の町に芳公馬鹿（よしこうばか）とて三十五六なる男、白痴にて一昨年まで生きてありき。この男の癖は路上にて木の切れ塵（ちり）などを拾い、これを捻（ひね）りてつくづくと見つめまたはこれを嗅（か）ぐことなり。人の家に行きては柱などをこすりてその手を嗅ぎ、何ものにても眼の先きまで取り上げ、にこにことしておりおりこれを嗅ぐなり。この男往来をあるきながら急に立ち留（どま）り、石などを拾い上げてこれをあたりの人家に打ちつけ、けたたましく火事だ火事だと叫ぶことあり。かくすればその晩か次の日か物を投げつけられたる家火を発せざることなし。同じこと幾度となくあれば、のちにはその家々も注意して予防をなすといえども、ついに火事を免（まぬか）れたる家は一軒もなしといえり。

九七　飯豊（いいで）の菊池松之丞（まつのじょう）という人傷寒（しょうかん）を病み、たびたび息を引きつめし時、自分は田圃に出でて菩提寺（ぼだいじ）なるキセイ院へ急ぎ行かんとす。足に少し力を入れたるに、図らず空中に飛び上り、およそ人の頭ほどのところを次第に前下（まえさが）りに行き、また少し力を入るれば昇ること始めのごとし。何とも言われず快（ここころよ）し。寺の門に近づくに人群集せり。何故（なにゆえ）ならんと訝（いぶか）りつつ門を入れば、紅（くれない）の芥子（けし）の花咲き満ち、見渡すかぎりも知らず。いよいよ心持よし。この花の間に亡（な）くなりし父立てり。お前もきたのかという。これに何か返事をしながらなお行くに、以前失いたる男の子おりて、トッチャお前もきたかという。お前はここにいたのかと言いつつ近よらんとすれば、今き

てはいけないという。この時門の辺にて騒しくわが名を喚（よ）ぶ者ありて、うるさきこと限りなけれど、よんどころなければ心も重くいやいやながら引き返したりと思えば正気づきたり。親族の者寄り集（つど）い水など打ちそそぎて喚（よ）び生（い）かしたるなり。

九八　路の傍に山の神、田の神、塞（さえ）の神の名を彫りたる石を立つるは常のことなり。また早池峯山・六角牛山の名を刻したる石は、遠野郷にもあれど、それよりも浜にことに多し。

九九　土淵村の助役北川清という人の家は字火石（ひいし）にあり。代々の山臥（やまぶし）にて祖父は正福院といい、学者にて著作多く、村のために尽したる人なり。清の弟に福二という人は海岸の田の浜へ婿

（むこ）に行きたるが、先年の大海嘯（おおつなみ）に遭いて妻と子とを失い、生き残りたる二人の子とともに元（もと）の屋敷の地に小屋を掛けて一年ばかりありき。夏の初めの月夜に便所に起き出でしが、遠く離れたるところにありて行く道も浪（なみ）の打つ渚（なぎさ）なり。霧の布（し）きたる夜なりしが、その霧の中より男女二人の者の近よるを見れば、女は正（まさ）しく亡くなりしわが妻なり。思わずその跡をつけて、遥々（はるばる）と船越（ふなこし）村の方へ行く崎の洞（ほこら）あるところまで追い行き、名を呼びたるに、振り返りてにこと笑いたり。男はとみればこれも同じ里の者にて海嘯の難に死せし者なり。自分が婿に入りし以前に互いに深く心を通わせたりと聞きし男なり。今はこの人と夫婦になりてありというに、子供は可愛（かわい）くはないのかといえば、

女は少しく顔の色を変えて泣きたり。死したる人と物いうとは思われずして、悲しく情なくなりたれば足元（あしもと）を見てありし間に、男女は再び足早にそこを立ち退（の）きて、小浦（おうら）へ行く道の山陰（やまかげ）を廻（めぐ）り見えずなりたり。追いかけて見たりしがふと死したる者なりしと心づき、夜明けまで道中（みちなか）に立ちて考え、朝になりて帰りたり。その後久しく煩（わずら）いたりといえり。

一〇〇　船越の漁夫何某。ある日仲間の者とともに吉利吉里（きりきり）より帰るとて、夜深く四十八坂のあたりを通りしに、小川のあるところにて一人の女に逢う。見ればわが妻なり。されどもかかる夜中にひとりこの辺に来（く）べき道理なければ、必定（ひつじょう）化物（ばけもの）なら

んと思い定め、やにわに魚切庖丁（うおきりぼうちょう）を持ちて後の方より差し通したれば、悲しき声を立てて死したり。しばらくの間は正体を現わさざれば流石（さすが）に心に懸り、後（あと）の事を連（つれ）の者に頼み、おのれは馳せて家に帰りしに、妻は事もなく家に待ちてあり。今恐ろしき夢を見たり。あまり帰りの遅ければ夢に途中まで見に出でたるに、山路にて何とも知れぬ者に脅（おびや）かされて、命を取らるると思いて目覚めたりという。さてはと合点（がてん）して再び以前の場所へ引き返してみれば、山にて殺したりし女は連の者が見ておる中についに一匹の狐（きつね）となりたりといえり。夢の野山を行くにこの獣の身を傭（やと）うことありと見ゆ。